

スキー・スノーボード実習報告 (3)

— 平成22年度～令和元年度 —

内山了治*1・児玉英樹*1・小川裕樹*2

An Examination of the skiing and snowboarding school from 2010 to 2019

UCHIYAMA Ryoji, KODAMA Hideki and OGAWA Yuki

キーワード：冬季スポーツ，スキー，スノーボード，アンケート調査

1. はじめに

本校のスキー実習^{1), 2)}は昭和38年開校以来継続している学校行事であり，平成（以下，Hとする。）13年度にスノーボードを取り入れ，H14年度に名称をスキー・スノーボード実習に変更するなど，様々な改善を行い継続している。実習の目的はスキーとスノーボード（以下，ボードと略す）技能の習得・向上，団体生活における規律面の向上，そして教員と学生及び学生相互の理解・親睦を深めることにある。本校の立地条件と雪深い北信濃の自然を生かした地域の特性に触れる本校の特徴的な実習でもある。

前報³⁾では，H11年度からH21年度までの11年間の実習内容と，学生へのアンケート調査結果をもとに報告した。おもな内容は，H11年以前に多発していたボードによる骨折事故等の防止のため，低学年で基本的な技能を習得できるようH13年度からボードを取り入れたこと，アンケート結果では実習の意義について「大いにあった・あった」との回答は各年度90%を超えていたことなどである。

本報では，H22年度から令和（以下，Rとする。）元年度までの10年間の実習の概要について報告する。この10年間も学生や教員の反省をもとに改善を重ね，特にH28年度に会場を志賀高原サンパレースキー場としたことが大きな変更点となった。また，グローバル化を推進するため2年次に海外研修旅行を行うことになった点（費用面），ならびに東京オリンピック開催に伴い学事暦が窮屈になった（授業日数）ため，令和2年度は本行事を中止することが決定された。

*1 一般科教授

*2 一般科准教授

原稿受付 2020年 5月20日

2. 実施状況について

2-1 実施状況の概要

実施状況の概要は表1のとおりである。学生の出席状況については，季節性インフルエンザの影響を受けたH26，H29，H30年度に当日欠席者，見学者及び途中で帰宅する学生が多かった。H27年度に旅行業者の選定を行うに当たり，開校以来お世話になった黒姫高原以外も会場候補地として広く検討し，宿舍，交通事情，経費面を含め総合的に判断し，H28年度から志賀高原サンパレースキー場を中心に，ホテルは300名以上収容可能な「ホテルサンパレー」にて実施することにした。経費の扱いについてもH28年度から，それまでの研修旅行と合体した積立金方式とすることができなくなり，この行事単体で保護者が直接旅行業者に支払う方式となった。また，H27年度以降毎年度入札方式で旅行業者を選定することになった。

学生のこの行事に臨む姿勢は各年度意欲的であり，アンケート結果からも実習の意義を認めている。スキーとボードの選択については，H26年度までは年度毎のばらつきが見受けられたが，H28年度以外はスキーが120名前後，ボードが80名前後となった。これは，事前に運動が余り得意で無い学生はスキーを選択した方が事故や怪我が少ないことの説明により，スキー選択者が多くなったものと推察される。実習態度は毎年度良好で，黒姫及び志賀高原スキー学校の指導員からも高く評価された。

2-2 年度ごとの特記事項

各年度の特記事項及び改善内容は次のとおりである。

1) H22年度

・入学当初のオリエンテーションの宿泊が無くなったため，この実習が初めての宿泊行事となり，布団・シーツの敷き方や生活面の事前指導が必要となった。

表1 実施概要

年度	実施期間 水～金	実参加者 (名)	不参加者 (名)	見学 (名)	引率者数 (名)	実習班数		人数(名)		指導員 (名)	備考
						スキー	ボード	スキー	ボード		
H22	1/26～28	205	0	6	10	12	6	150	55	18	オリテンの宿泊がなくなる
H23	1/25～27	207	0	4	8	9	9	102	105	18	人事交流教員と教務係長引率者
H24	1/23～25	206	8	9	8	7	11	88	118	18	ホテルご主人の講演会開催
H25	1/22～24	204	2	5	8	8	10	90	114	18	夕食後の学習者が増加した
H26	1/21～23	205	2	14	9	9	9	106	99	18	学習用に自習プリント配布
H27	1/20～22	205	0	5	7	8	11	90	115	18	黒姫最終年度
H28	1/25～27	205	6	4	8	10	8	115	90	18	志賀高原初年度, 旅行者に依頼
H29	1/17～19	195	6	14	9	10	8	120	75	18	インフルエンザ対応に苦慮
H30	1/16～18	197	5	38	9	11	7	120	77	18	看護師初同行
R元	1/15～17	196	4	6	8	10	8	118	78	18	暖冬による雪不足

・高専間人事交流鈴木先生(東京)が引率に加わった。
 ・部屋によっては、押し入れに寝ている学生がおり、部屋数が足りないという意見があった。

2) H23年度

・小宮山先生に代わり副担の石川先生が2組を担当し、高専間人事交流鈴木先生(木更津)と安藤教務係主任が引率に加わった。

・これまで食事に使用していた広間2部屋を居室とし、ロビーに机を配置し52名分の食堂とした。これにより、居住スペースは改善されたが、別館150号室は人数分の布団が敷ききれないなどの課題も残った。

・グレンデの食堂での昼食は、講習終了の時差を設けたため混雑は解消された。

・レンタルボードの置き場が狭いこと、スキー靴等も同様に置かせて欲しい要望が多く出された。

・緊急時の対応、教員の任務内容の確認など事前に徹底すること、女性引率者の検討、レンタル修理の対応、ホテルの入札制等の課題が出された。

3) H24年度

・1, 2日目は天候に恵まれ、最終日は新雪も経験できた。体調不良、怪我等が少なく成果を高めた。葉には実習記録及び反省がきちんと記入されていた。

・黒田校長・岸先生・市川技術専門職員(23日)、石田学生課長(23・25日)、戸谷教務主事(25日)が激励に来られた。

・ボードの置き場所について、これまでの倉庫が使用できないため、ホテル若月さんがスマイルハウス2階を手配し、約100台置くことができた。

・1日目の夕食後にホテルご主人(若月新一さん)に講師をお願いし、講演会を開催した。受講者は17名と少数であったが、オーストラリア国家資格取得やインタースキー等の講演に聴き入った。参加者からは「貴重な話が聞けた」「刺激になった」等の感想が寄せられた。

・引率者に1名は女性を含むよう要望が出された。

4) H25年度

・黒田校長・岸先生・市川技術専門職員(22日)、石田学生課長(23日)が激励に来られた。

・4Fの学習スペースは室温が低かった。学生は40人

程度が、学習に取り組んでいた。

・引率者の本部待機の順番・時間帯を明確にし、対応できたことは良かった。

・公用車に学生を同乗させて良いかなど利用範囲の確認や、タクシーチケットの準備など、緊急時の対応について引率者が共通理解しておく。また、学校から持参する救急箱の中身をチェックする。

5) H26年度

・夕食後に自習プリントが配布されたため、4Fの学習室やロビーでは、熱心に勉強する学生の姿があった。

・黒田校長、岸先生、和田・市川技術専門職員が激励に来られた(21日)。

・別館の宿泊環境が悪いことが再指摘された。

6) H27年度

・黒田校長、岸先生、和田・市川技術専門職員が激励に来られた(20日)。

・実習期間中は「ゲーム類一切禁止」としているが、昼休みの休憩時間や帰宿後に、スマホで「ゲーム」をしている学生に注意することがあり、残念だった。

7) H28年度<志賀高原初年>

・開校式で石原校長からご挨拶と激励をいただいた。

・宿泊、講習等特に問題なく充実した実習となった。

・実習日程が学年末試験に近いので、学力が低い学生は心配であり日程調整も必要である。一方、年度当初から日程は分かっているため、危機的な状況にならないように学生が取り組むことも必要との意見があった。

・行事に関する保護者の賛否も参考にすることも必要であるという意見も担任団から出された。

・終了後の旅行者による学校と保護者への会計報告が速やかに行われなかった。

8) H29年度

・インフルエンザで発熱した学生の対応が大変だった。

・3日間とも天候に恵まれず、初日の雨によりバーンが固くなりまた積雪も少ないため、ボードの初心者を中心に打撲等が例年より多くなった。

・レンタル料金の支払いと入浴時間は分けた方が良い。

9) H30年度

・宿泊、講習等特に問題なかったが、発熱した学生が10名、怪我のため診療所で治療を受けた学生が4名、最終日の見学者が38名になるなど、体調管理ができない学生が目立った。

・看護師さんが初めて同行し、病気・怪我の適切な対応や生活面の指導まで行っていただき非常に助かった。

・夕食後に部屋に戻り寝てしまう学生もいた。部屋に戻らないこと並びに朝の施錠を徹底させる。

・女子学生の荷物置き場がやや狭い。

・見学が好条件なため、簡単に見学してしまう学生について対策を講ずることが必要である。

10) R元年度

・暖冬で志賀高原も降雪量は少なく、人工雪がベースのためバーンが固く、ボード受講者に骨折や打撲等の怪我が例年より多く見受けられた。また、インフルエンザの影響も少なく、講習、ホテルでの生活など特に問題はなく予定どおり実施できた。

・看護師さんに病気や怪我の適切な対応や生活面の指導まで行っていただき非常に有り難かった。

2-3 引率者(敬称略)

- 1) H22年度 10名：(担任) 久保田和男, 水口学, 林本厚志, 高桑潤, 戸谷精三, (副担) 平戸良弘, (体育) 塚田修三, 内山了治, 児玉英樹, 鈴木智之(東京)
- 2) H23年度 8名：(担任)内山了治, 奥村紀浩, 平戸良弘, 板屋智之, (副担)石川美久, 鈴木道治(木更津), (体育)児玉英樹, (教務係) 安藤秀一
- 3) H24年度 8名：(担任) 奥村信彦, 中澤克昭, 児玉英樹, 濱口直樹, 小林茂樹, (副担)高桑潤, (体育)内山了治, 石川美久
- 4) H25年度 8名：(担任) 堀内泰輔, 大西浩次, 富永和元, 山崎健一, 小池博明, (体育)内山了治, 児玉英樹, 石川美久
- 5) H26年度 9名：(担任) 久保田和男, 小宮山真美子, 林本厚志, 高桑潤, 戸谷精三, (副担) 板屋智之, (体育)内山了治, 児玉英樹, 石川美久
- 6) H27年度 7名：(担任) 板屋智之, 二星潤, 奥村紀浩, 平戸良弘, 児玉英樹, (副担)柳沼晋, (体育)内山了治
- 7) H28年度 8名：(担任) 内山了治, 鬼頭葉子, 柳沼晋, 小川裕樹, 小林茂樹, (副担)高桑潤, 小原大樹, (体育)児玉英樹
- 8) H29年度 9名：(担任) 大西浩次, 小原大樹, 西信洋和, 富永和元, 小池博明, (副担)赤瀬正樹, (体育)内山了治, 児玉英樹, 小川裕樹
- 9) H30年度 9名：(担任) 林本厚志, 小宮山真美子, 赤瀬正樹, 平戸良弘, 高桑潤, (副担) 奥村紀浩, (体育)内山了治, 児玉英樹, 小川裕樹
- 10) R元年度 8名：(担任) 板屋智之, 二星潤, 奥村紀浩, 滝沢善洋, 小川裕樹, (副担)西信洋和, (体育)内山了治, 児玉英樹

2-4 ボードとスキー選択者の割合について

ボードの選択状況について、図1に年度毎の選択者数と初めて体験する者の割合を示した。ボードは時代の流れと学生の要望に加え、骨折等の怪我防止を目的としてH13年度に導入しR元年度で19年目を迎えた。導入当初は6～7割近い学生が選択したこともあったが、積雪が少なく滑走バーンが硬い場合は、転倒による手首や膝の打撲・捻挫、頸部捻挫等の怪我が増加するため、学生へのオリエンテーションの際に、装備を含めた安全対策や実習の成果を高めるには「運動が余り得意でない者は、スキーを選択した方が無難であること」を指導してきた。その結果、H22年度はボード選択者が55名(26.8%)と減少したが、H23,H26年度はほぼ同数,H24,H25,H27年度のみボード選択者が5～7%多く、H28年度以降は約4割程度となっている。この10年間の平均値はスキー選択者が54.4%,ボード選択者が45.6%であった。ボード選択者のうちこの実習で初めて取り組む学生の割合は、H23,H24,H28,R元年度は8割以上、10年間の平均値は73.2%であった。学生の上達の上達は速く、片脚歩行から始まり、平らな所でのターン、エッジを効かせたり外したりしながら降りる「木の葉落とし」などを習得し、3日目には大回りのターンで滑走できる学生も見受けられた。初めて取り組む学生が日帰りで受講したとしても、その上達の幅は限られると思われる。

2-5 安全指導とその対策, 病気・怪我の状況

安全について、ボードを初めて体験する学生が多いことから、スキー、ボードともに安全対策と技術体系に関するテキストを用意し事故事例の提示と注意喚起を行っている。また、短期間に成果を高めるためには、ほぼ等質のグループ編成が効果的であることから、自らの技能と選択グループをマッチさせるため、合同HRで過去の実習の様子や市販のVTR映像等を用いて

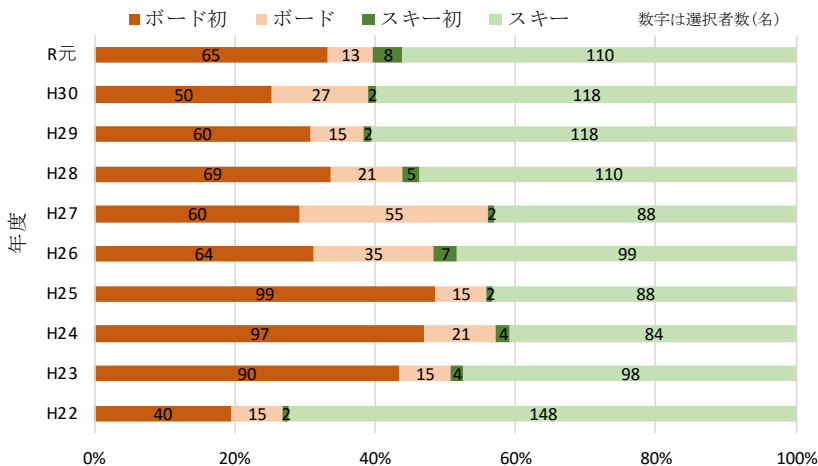


図1 スキーとボード選択者及び初心者の割合 (%)

表2 病気・怪我の状況

年度	天候	病気・怪我
H22	①晴②雪 ③雪	病院受診1(膝靭帯損傷), 体調不良6
H23	①晴②雪 ③雪	病院受診0, 腹痛1(帰寮), 捻挫3, 創傷1
H24	①②小雪 ③曇後晴	病院受診2(手首骨折1, 頭部打撲1)
H25	①晴後曇 ②雪③雪	病院受診(体調不良, 帰宅者1)
H26	①晴②雨 ③曇り	病院受診2(手首骨折, 捻挫), 体調不良による見学最終日14名
H27	①雪②晴 ③雪	体調不良等による見学5名, 帰校後脚3針縫合1名(ボードによる怪我)
H28	①晴②晴 ③晴	頭部打撲で受診1(異常なし), 見学4名
H29	①小雨②曇り③晴	手首骨折1, インフルエンザによる帰宅者5, 体調不良等による見学のべ23名
H30	①曇②晴 ③曇	怪我による受診4(手首骨折他), 発熱10, 最終日見学38名
R元	①曇②晴 ③晴	手首骨折1, 顔面打撲1, 見学6名

・①～③の数字は実習日

極力具体的に、実習面、生活面の双方について説明し、例年多い問題点等についても事前に指導している。

病院で診察を受けなければならないような病気と怪我の状況については、表2にまとめたとおりである。

骨折はすべてボード選択者であり、上級者で講習以外のフリー滑走中に発生する事例もあった。骨折する学生を無くすような装備の充実、事前の指導をさらに行う必要性が高い。また、ボード導入以前は年に2～3人はボードで骨折する学生が見受けられたが、導入後は上級生でもほとんど見受けられないことから、1年次にきちんと指導を受けることが傷害の発生を抑えることに大きな役割を果たしてきたといえる。

また、インフルエンザ対策は、予防接種の呼びかけ等を行っているが、H29、H30年度はホテルでの症状悪化や発症する学生が目立ち、帰宅等の対応に苦慮した。寮生の場合は同室者が感染した場合は他方もほぼ感染しているので、事前の健康チェックをしっかりと行い、感染の可能性のある学生は参加させないなどの事前指導が重要である。また、H30年度からは看護師が同行し、体調不良、怪我、予防対策等きめ細やかな活動をしていただき非常に助かった。特に、医療機関受診の判断、受け入れ先病院の確保なども行っていただき、スムーズな診断・治療に結びついた。

また、H28年度からの志賀高原では、ホテルの玄関を出るとゲレンデという環境となり、開校式、講習の集合、解散及び点呼はスムーズに行えるようになった。それ以前の黒姫高原ではゲレンデまでホテルから歩いて10分～15分要し、見学者もゲレンデ近くの食堂まで移動していたが、志賀高原では見学者も暖かいホテル

内で移動なしに学習できることになり、このためか見学者が増加し、H29年度は23名、H30年度は38名もの学生が見学することになった。安易に見学をさせない方法も工夫しなければならないと思われる。

講習に於いては、黒姫ならびに志賀高原スキー学校指導員の先生方18名に大変お世話になっており、毎年度、懇切丁寧にご指導いただくとともに、学生の受講状況や怪我・体調不良等の情報交換、最終的な技能評価も実施していただいている。志賀高原ではバスの駐車場からホテルまでの往復経路の安全指導もご指導いただいた。

2-6 経費について

スキー実習に要する経費は、宿泊、バス、指導員、リフト券、保険、スキー・ウェアのレンタル料である。これらの経費のうち、宿泊、リフト券、傷害保険および指導員費の一部については、H27年度までは研修旅行積立金から支出していたが、H28年度以降はそれが困難となり、旅行業者に保護者が直接振り込むか、学生が指定日に直接支払うこととなった。バス代、指導員費の一部は国費と後援会費でまかなわれている。用具のレンタル料金については、H17年度以降は実習当日ホテルで学生が個々に支払っている。

1泊3食の宿泊費と3日券のリフト料金の年次変化は図2に示した。宿泊費についてはホテルのご配慮でH25年度に6000円に値下げしていただいた。H28年度以降は入札により学年全体が1つのホテルで、他団体が入らないこと、ゲレンデに近く講習を行いやすいこと、バスの駐車場が近くにあることなどを条件に選定したが、旅行業者が入ることに関する増加分はやむを得ないといえる。3日間のリフト料金は、黒姫高原はリフト券のシステムが専用チップの使用を中止し、人による確認方式に戻ったことによりH24年度以降は6000円となった。志賀高原は5660円の格安料金であるがリフト券を紛失した場合は保証料500円が必要となる。レンタル料金については、これまでどおり地元の業者に依頼し交渉することで、スキー、ボードセットが3日

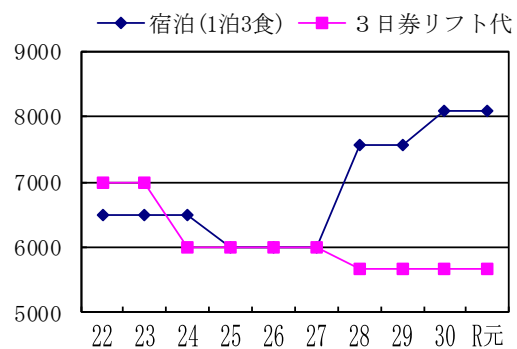


図2 宿泊とリフト料金の推移 (年度)

間で3000円、ウェアも3000円など、通常1日あたりの料金で3日間レンタルできている。食事についても昼食を含め大盛りのサービスをしていただいております。志賀高原では快適でゲレンデに直面した温泉付きのホテルで、これまでに無い良い環境となっている。レンタル料を除く学生一人当たりの負担額は27,000円前後であり、内容を考慮すると価格面では決して高いとはいえない。

本実習は、脱いだ履物を揃える、使った寝具をたたくで片づけるなど、学校・社会生活で必要とされる能力や態度を身につける機会でもある。最近の学生の様子からは、旧黒姫山荘のような一人1畳以下の布団のみの居住スペースで、食事の準備や片付けも自ら行うなど、実習全てが「トレーニング」となる環境も必要ではないかと思われる。

3. 学生のアンケート結果

課題や反省点を生かすため、実習終了後にアンケート調査を継続しており、その一部を報告する。

3-1 実習への参加姿勢について(図3)

実習への参加姿勢はこの10年間各年度とも9割以上の学生が「大変意欲的」「意欲的」と回答している。中でも、ボード選択者については95%以上、H30年度は全員がそのように回答し、新しいことへの挑戦などこの実習への意欲と期待度は高いといえる。一方、「全く意欲がない」との回答は無い年度もあったが、多くても学年で6名(0~3%)程度であり、これらはスキーの選択者のみであった。

3-2 技能の向上について(図4)

技能の向上については、この10年間で「向上しなかった」と回答した学生の合計数は、ボード選択者は1名、スキー選択者は12名であった。ほとんどの学生が意欲的に取り組み成果を実感したことが窺える。ボードの特性として上達が速いことがあげられ、実習初日にボード上にやっと立てた者が、最終日はある程度のターンを滑り降りる事ができるようになるなど、練習効果を直ちに確認できる楽しいスポーツでもある。

3-3 実習の意義について(図5)

スキー・スノーボード実習の総合評価として実習の意義について各年度回答を求めている。「意義が大いにあった」「意義があった」との回答は、ボード選択者では各年度90%以上を占め、スキー選択者ではH23年度に83.2%に低下するものの、その他の年度は85%かそれを超えていた。スキー選択者は技能の向上と同様な傾向を示している。これらの結果から、地域の特性を生かした本実習としての所期の目的は

達成されていると判断できる。

4. 本実習の課題と対策

H22年度から令和元年度までのスキー・スノーボード実習についても、従前どおり実習後の学生アンケートをもとに担当学年と協議し課題を明確にし、改善を重ねてきた。特にH27年度には旅行業者の入札を行い、会場地とホテルを変更し、H28年度から志賀高原で実施している。学生の総合評価も高く、引率教員も回数を重ね業務も効率化されてきたと思われる。同時に、H17年度とH21年度に教務委員会が本科5年生を対象として実施した学校行事満足度調査において、80%以上の学生が「大いに満足した」「満足した」との回答からも、本実習の意義を見出すことができ、本校の第2期中期目標・計画書(H21年度～H25年度)では、「地域の特性を生かし、1年生でスキー・スノーボード実習、2・3年生でスケート実習を実施する」⁴⁾ことが明記され、本実習は本校の教育方針・学習教育目標を達

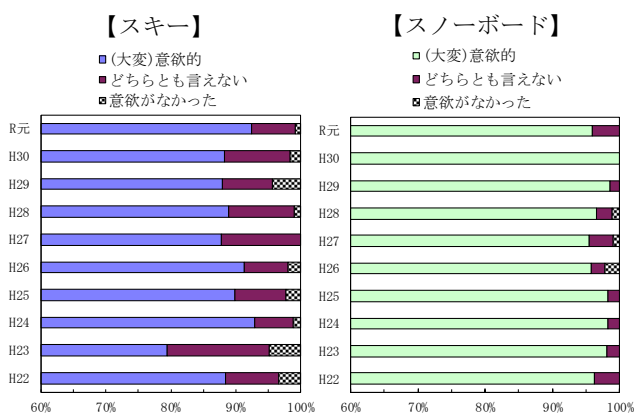


図3 実習への参加姿勢について

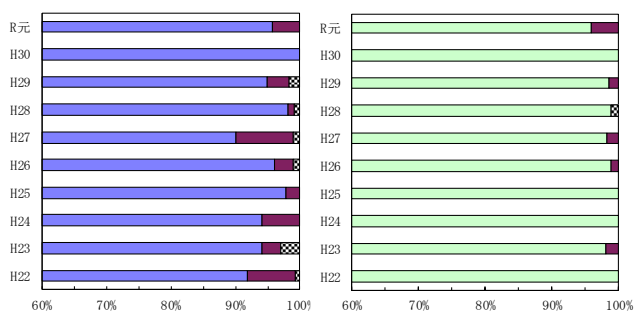


図4 技能の向上について

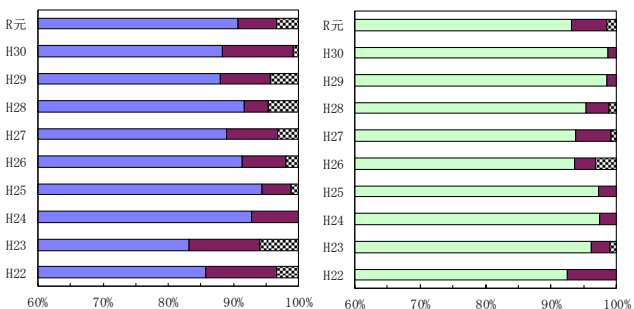


図5 実習の意義について

成する手段の一つとして位置づけられた。(その後の中期目標には高専毎の記述がなくなっている。)

しかしながら、令和2年度当初に、本年度入学生は2年次に海外の研修旅行を実施することになり、経費が嵩み保護者の負担が大きいことから、1年次のスキー・スノーボード実習は中止との提案が教務主事からあり確定された。本行事の課題や意義、これまでの経緯等も含めこの行事の本校としての位置づけ、内容、方法等については全く議論されず、別の要因でこのような結論に至ったのは非常に残念である。

また、令和元年度の1学年担任団から次のような意見があった。「ホテルが快適」、「看護師がいて助かる(ケガ、体調不良)」、「ホテルの方が病気や負傷した学生を医療機関に搬送してくれるのでありがたい」、「実習回数が多い」、「2泊だとお金がかかる、1泊ではどうか」、「志賀高原という場所が良い。」「暖冬の今年は黒姫だと開催できなかった。このような際はどのように対応していくのか」、「2年次に初めての宿泊行事で、さらに海外の研修旅行だと心配。1学年で宿泊行事を行った方がいい。」

課題としては、まず本校の行事全体をどう位置づけ配置するのか議論が必要といえる。これまで各種行事を見直し、各学年1回は宿泊する行事を伴うことで進んできたはずである。次に本実習については、遠距離通学生への配慮や技能向上という目的を達成するには日帰りは困難である。ボードは講習3回目くらいからようやく成果が見えるため、最低でも1泊は必要といえる。また、実習の準備、効率や怪我防止等を考慮すると1年次で2泊3日の開催が最も効果的である。希望者のみの場合は宿舍の確保が厳しくなり、確保できても本校貸し切りは困難となる。経費については、過去のように研修旅行積立金として1年次の5月から2年次の10月まで16ヶ月、毎月1万円ずつ積み立てれば1年次の本実習も2年次の海外研修も十分に可能である。教育には経費が必要であり、月1万円(本実習分は2000円程度)の保護者負担は理解が得られるのではないだろうか。教員の負担については、特に宿泊に関する業務については、「寮の宿直をスキーの宿泊地で行う」と考えることができれば、学生200名に体育教員以外の2名が輪番で担当できれば十分といえる。実習中は現状も指導員に任せているし、体調不良の学生は最初から参加させない方向であれば、現地での指導は寮の宿直業務以下の負担となると思われる。また、開催時期も志賀高原であれば授業への影響がない3月中旬くらいまでは十分可能である。県外の高専が時間を掛けてスキー実習を行うことを考慮すれば、まさしく地域の特性を生かした有意義な実習を否定する理由は余り見当たらない。

本実習の今後のあり方としては、本校の教育方針、目標および中期目標との整合性、行事なのか或いは教科体育の内容として扱うのかという位置づけの明確化、学生の実態、さらには毎回提出してきた学生の参加姿勢や実習に対する評価・意見、保護者の意見なども十分に加味し判断することが必要であると考えられる。

5. まとめ

本報では、H22年度からR元年度までのスキー・スノーボード実習の概要と学生のアンケート結果に基づき報告した。この期間の本実習は、H28年度以降志賀高原で実施したことが大きな特徴である。本校でこの実習がこれまで57年間継続できたことは、学校発足当初からの高い教育理念と関係者の努力の賜物であり、この実習の意義と教育的効果が認識されてのことと思われる。実習を推進する側としてこれらのことに常に敬意を表すとともに、学生のために継続・発展させる責任も感じている。

本実習は、本校の地理的好条件を有効に生かすことができ、単にスポーツ技能の向上のみならず、厳しい自然の理解、どのような条件下でも自らを律し予定どおり行動しようとする強い意志、コミュニケーション能力や人間基礎力の養成に役立つ機会と考えられる。また、実習をとおして、悪条件の中でも逆境に耐える強い意志の養成や活動体力の向上など、逞しい学生を育てる機会の一つになっていることも事実と言えよう。

学生の人間力向上や近年の本校の教育課題解決策としては、学生と直接向かい合うこと、教育実践に力を注ぐことがより近道になるのではないだろうか。この年代の学生にとって、教室の授業のみで人間力が高まることを支持する教員はほとんどいないと思われる。この実習は教育実践そのものであり、学生をよく知り捉える絶好の機会ともいえる。

参 考 文 献

- 1) 長野高専三十年史編集委員会：長野高専三十年史 pp372-396, 1993
- 2) 塚田修三・内山了治・児玉英樹：平成5年度から10年度のスキー実習報告, 長野工業高等専門学校紀要第33号, pp169-174(1999. 12)
- 3) 塚田修三・内山了治・児玉英樹・鈴木智之：スキー・スノーボード実習報告(2)-平成11年度から平成21年度-, 長野工業高等専門学校紀要第44号, 2-3, pp1-6(2010. 6)
- 4) 長野工業高等専門学校第2期中期目標・計画書(平成21年度～平成25年度), p25(2009. 7)